

Title	<書評>B. D. シャクリー・N. バーバー・R. アンブローズ・S. ハンズフォード著 (田中耕治監訳) 『ポートフォリオをデザインする：教育評価への新しい挑戦』
Author(s)	木原, 成一郎
Citation	教育方法の探究 (2002), 5: 103-106
Issue Date	2002-03-31
URL	https://doi.org/10.14989/190254
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

【書評】

B.D. シャクリー・N.バーバー・R.アンブローズ・
S.ハンズフォード著（田中耕治監訳）

『ポートフォリオをデザインする－教育評価への新しい挑戦』

木原 成一郎

2001年4月、文部省から「児童・生徒指導要録改善等について（通知）」が出され、各学校の指導要録の様式が改訂されることとなった。さらに、同年5月には教育政策研究所教育課程センターがホームページで「評価規準、評価方法等の研究開発（中間整理）」を公表した。そこでは、地方自治体や各学校で単元レベルの詳細な学習評価の基準を作ることが求められている。学校では、2002年4月から全面実施の「総合的学習の時間」も含め、学習評価の基準や学習評価の方法を開発することが焦眉の課題となっている。特に冒頭に述べた文部省の通知で「児童生徒の自ら学び自ら考える力などの『生きる力』の育成の状況を総合的に評価する工夫」が求められたため、従来の標準テストでは捉えることのできなかつた幅広い子どもの「学び」の過程や結果を評価しようとする「ポートフォリオ評価法」に注目が集まっている。

これまで「ポートフォリオ評価法」の精力的な紹介を行ってきた監訳者が、「これから『ポートフォリオ評価法』に取り組もうとされている先生たちやすでに『ポートフォリオ評価法』を実践する中で新しい課題に直面している先生たちに対して具体的で示唆に富む内容」と判断し、大学院生を含む若手研究者を組織して翻訳したものが本書である。誠に時宜になつた出版である。

それではまず、その概要を紹介しよう。巻頭の「翻訳にあたって」と「日本語版への序」では、監訳者と著者の双方がこの本の特徴を簡潔に記している。筆者は、著者の次の指摘に注目した。「ポートフォリオはまた、アセスメントとエヴァリュエーションをダイナミックにみるものであり、このことによって教師は、教授にかかわる意識決定をより正確に行うことができるようになるのです。」つまり、ポートフォリオは学習の「アセスメント」と教育の「エヴァリュエーション」の双方に貢献するという点である。さらに、「ポートフォリオは、児童たちに、自己評価と教育目標設定の手段を提供することができる」と述べ、評価過程へ子どもを参加させる焦眉の課題に取り組んだ成果という点である。

また、「日本語版への序」と「はじめに」で、本書は「例外的潜在能力の早期評価プロジェクト」の成果であるとされる。低収入もしくはマイノリティーの集団に属する子ども達の「普通だと見過ごされてしまうような特別な才能」を識別するというプロジェクトの目的のために、知能テストや標準テストという方法ではなく、信頼性の高い「真正な手段」として「ポートフォリオ

評価法」が採用されたのである。

第1章「真正の評価（Authentic Assessment）への道」では、「ポートフォリオ評価法」の理論的な特徴が簡潔に述べられている。つまり、「ポートフォリオ評価法」は、アメリカの1970年代以降の標準テスト批判から生まれた「真性の評価、すなわちパフォーマンス評価（performance assessment）」であるという点である。「真性の評価」は、「教育に関連したリアルな課題に取り組みさせる中で子どもを評価する、一連の評価実践」であり、単なる技術的な学習評価の方法にとどまるものではない。その内実は、「評価」「学習についての仮説」「環境」「教師の態度」「情報の活用性」「ポートフォリオ評価法とポートフォリオ収集との違い」という項目に従って説明される。

「学習についての仮説」では、本書は「構成主義（constructivism）」の立場で教師の教えと子どもの学びを説いているとされている。つまり、子どもの学びを、生活経験の中で身につけた子どもの考えや経験が、子どもの環境との能動的な相互作用によって、新たな意味を付与され新たな理解が構成される過程と理解するという。この立場にたてば、子どもが実際に持っている概念や知識を教師が知ることなしに、子どもに何かを教えることは意味を持たないことになる。

「環境の構成要素」は、「家具、部屋の設計、空間の配置、時間割、大人や仲間との相互人格的な相互作用」に加え、「カバーされるべき内容やカリキュラムの選択」などである。「ポートフォリオ評価法」に必要な環境は、子どもたちがグループで学習することができるような柔軟な物理的空間や時間割に加えて、テーマや学問横断的なトピックによって組織化された「統合カリキュラム」、さらに直接的な指導者ではない促進者としての教師であるとされている。

「ポートフォリオ評価法とポートフォリオ収集との違い」は、次の3つにまとめられる。第1に「児童を評価するための明確で明細な、そして研究成果に基づく基準（クライテリア）」が準備され、教師も児童も親も理解できるような観察可能な行動に翻案されること。第2に、担任と児童以外に親や保護者、地域の人々、学校の管理者やクラスメートを情報源に加え、筆記された証拠以外のテープや観察記録、自己申告表、相互評価という多様な方法を活用すること。第3に、ポートフォリオの作品にもとづいて授業やカリキュラムを修正する過程をもつこと。

第2章の「意思決定過程としてのポートフォリオ評価法」では、ポートフォリオを使用する目的の決定、評価参加者の決定、何が評価されるのか、その評価はいつ行われるのかなどについて、幼稚園と小学2年生を担当した教師の意思決定の実例が紹介されている。

第3章の「設計、実践、そして管理」では、小学校6年生を担当する教師が作成したポートフォリオの評価規準、家庭・コミュニティ調査の実例、子どもの長所の観察ノート、児童が発表するポートフォリオ検討会の計画の実例が紹介されている。

第4章の「授業の計画時にポートフォリオの結果を使うには」では、評価過程に子どもを参加させる焦点の課題に応える実例が注目された。つまり、児童が自分の学習の成果である作品を示して、学習の目標や成果を自己評価して発表する「児童が主導する検討会」である。94頁から99

頁までその実例が紹介されている。その実例をみると、検討会までに児童が教師の作った「検討会計画ノート」を用いて発表内容と発表方法を丁寧に準備していること、発表の内容は「作文」「数学」「社会科」「科学」「行動」という幅広い領域に及んでいることがわかる。6年生の児童が親と教師に対して発表した検討会の実例をみると、テストの点数に加えて、作文で「オノマトペ、隠喩、直喩、頭韻、擬人法と俳句」を学習したことや、数学の分度器で角度を作図できる学習結果など、学習した内容を含んだ児童の自己評価が発表されている。

第5章の「評価のパラダイムを転換する」は、教師個人や学校などのマイクロレベルと学区レベルの制度というマクロレベルの双方の転換について、本書の母体となったプロジェクトの例が紹介されている。ボトムアップであろうがトップダウンであろうが、改革が進むためには、特別の時間の確保や教師へのサポート体制の構築、説明責任の実施、反省的な実践家の参加という課題が生まれてくると結論付けられている。

本書の特徴は、2章から5章に教師の手記やポートフォリオの実例が豊富に紹介されている点にある。さらに、それらの実例がアメリカの評価改革運動の蓄積を背景に生まれたことも本書の特質となっている。つまり、「標準テスト」を乗り越えようとする「真性の評価」と子どもの日常的で素朴な理解の強固さをリアルに捉える「構成主義」の立場、さらには「統合カリキュラム」の実践が相互に結びついてポートフォリオ評価法が生まれたと本書は主張しているのである。

ここで、筆者が感じた疑問点をふたつあげておきたい。第1に、カリキュラムや授業の過程をポートフォリオの情報にもとづいて修正したり、向上させたり、調整する実例とされた第4章の事例への疑問である。84頁から87頁に紹介された「テーマ単元：地域社会」は、「全体活動」→「小グループの関心領域」→「子ども一人ひとりの活動」→「発表会」→「評価」と構造化されているが、この構造そのもののよしあしは評価されたのであろうか。実例を見る限り、グループ活動の課題や規模、回復学習や発展的な授業などの教授方略の修正は提案されているようだが、テーマ単元の構成自体の良し悪しの判断が子どもの多様な作品を活用してどのようになされるのかについて、残念ながら読み取ることができなかった。

第2に細かいことになるかもしれないが、訳語とそれが意味する内容の問題である。23頁に基準（クライテリア）とあることから、criteriaの訳語として基準を使い、22頁から24頁に「スタンダード作り」「ナショナル・スタンダード」とあるようにstandardの訳語としてスタンダードを用いていると推察される。その上で、criteriaとstandardの意味内容はどう区別されるのか。スタンダードはマクロな一般的尺度で、基準（クライテリア）は60頁にあるようなルーブリックレベルの作品を判断できるマイクロな尺度と筆者は理解した。「監訳者による解説」（143-146頁）で「クライテリア」と「ルーブリック」の解説はあるのだが、「スタンダード」の説明がないのが残念であった。またこれまでクライテリアは「規準」と訳されることが多かったように思うが、あえて「基準」と訳す意図はどこにあるのか解説して欲しいと感じた。

翻訳にあたり、巻末に「監訳者による解説」が付けられ、「真性の評価」「構成主義」「検討会」

「評価参加者」「クライテリア」「ルーブリック」などの用語にアメリカの実例を付した解説が加えられている。この解説は初めてアメリカのポートフォリオ評価法に触れる読者に好適のガイドとなっている。ここから読み始めるのもおすすめである。(ミネルヴァ書房、2001年、2200円)

(広島大学助教授)